

イランにおけるシーア派の回生

—宗教社会学試論として—

川崎 喜久子

I はじめに

世界史に屹立する社会的事象、たとえば革命と呼ばれるような歴史的現象は、それに共通する基礎的諸条件を基盤として、なおかつそれ固有の特殊条件に囲繞されながら、歴史的個物として出現する。1979年2月に勃発した「イラン革命」が、他の諸革命と大きく異なる点は、「イスラーム」という宗教を媒体とし、その宗教が革命の遂行にあたって決定的な役割を演じたことであった。

ヨーロッパ的人権思想の洗礼も、民主主義体験も持たず、さらには近代的労働組合組織も未発達なイラン社会において、革命の源動力となり、革命の遂行にあたって強力な指導力を発揮し、大衆を「革命の物理的力」として凝集させた宗教が、なぜこの時点において有効に作動し得たのであろうか。カーン・ユスフザイは、「マホメットの教えが回教国の国民生活に、過去から現代までいかに深く根づいているかを直視することが、とりも直さず、今回のイラン革命を理解する有益な手助けになるはずである。」⁽¹⁾と指摘している。

莫大なオイル・ダラーを背景としたシャー（イラン国王）の急激な近代化政策をあらわす「白い革命」、イスラーム・シーア派の最高指導者ホメイニ師に率いられた反体制派の「黒い革命」、ツデー党および革命的マルクス・レーニン主義者たちによる「赤い革命」の諸力が、イスラームの伝統的価値体系が、大衆の日常生活の隅々にまで浸透した特殊な社会構造の内部で激突したのである。

本稿ではこのコンフリクトのメカニズムを、「黒い革命」を焦点として、イスラーム・シーア派とイランの特殊歴史的展開をたどりつつ、シャーの近代化政策の破綻が、「バザール」と「モスク」の利害関係を軸として、最終的には、大衆動員に作動していく革命イデオロギイにも視点が注がれる。

註(1) カーン・ユスフザイ「シャーは神に追われた」文芸春秋、1979年5月号、162頁。

II イランとシーア派

イラン革命の宗教的背景を理解するにあたって、イラン人のイスラーム・シーア派受容の歴史的背景と、その宗教的特質をフォローすることは不可欠の作業である。全世界のイスラーム教徒、約6億のうち、90パーセントはスンニー派（正統派）に所属する。しかし、イランの複雑な歴史的、文化的、政治的諸要因が、圧倒的多数のスンニー派に対抗して、イラン人に少数異端のシーア派を選択させたのである。以下、イラン史およびイスラームとシーア派についての概略である。

イランという国名は、1935年にそれまでのペルシャを改名したものである。パーレビ国王が、1971年、ペルセポリスにおいて、ペルシャ建国2,500年祭を盛大に挙行了ことは、人々の記憶に新しいところである。「シャーハンシャー」（王の中の王）を自負していた王も、イラン国民も、自国の栄光の歴史に、かぎりない矜持を抱いていたのである。

その端緒は紀元前2,000年頃、アリア人がイラン高原へ移住してきたことから始まる。先住民のメディア人を征服したキロス2世は、紀元前559年、アケメネス帝国を設立し、ダリウス1世（紀元前522—488）治下で最盛期を迎え、領土の拡大と文化の興隆には、著しいものがあった。その後、紀元前330年に、アレクサンダー大王の東方遠征に屈し、滅亡するが、紀元226年、ササーン朝が創設されるまで約6世紀のあいだ、イランは異民族支配下に置かれる。

ササーン朝を興したアルダシール1世は、ゾロアスター教を国教に定め、精鋭な軍隊を用いて征服事業を遂行し、シャープール1世（241—272）の時代には、東はインダス河流域から、西はシリアにおよぶ大帝国を建設した。約4世紀にわたる民族王朝の時代も、やがてローマとの長期にわたる紛争の結果、国力は衰え、新興勢力としてのイスラーム・アラブ軍の侵略を蒙り、641年ササーン朝は滅亡する。この7世紀におけるイスラーム・アラブの侵入を期に、イラン史は大きく前後に区分されることになる。そして、これ以後イラン人は、それまでの固有の宗教であったゾロアスター教から、イスラームに改宗していくのである。

しかし、イラン人は正統派のスンニー派に帰依したのではなかった。641年、サラセン帝国の版図下に所属するようになったイランは、2世紀におよぶアラブ支配時代を迎え、その間、解放奴隷としての差別を受けるが、この屈辱はペルシャ民族意識を覚醒させ、「受難の意識」は、アラブ人にたいする抵抗の武器として、少数異端のシーア派受容へと傾斜させるのである。⁽²⁾ スンニー派とシーア派は、イスラーム史のなかで激しい抗争を展開す

註(2) イランではシーア派は民衆の側から浸透していった。アラブ支配時代には、とくにアッバース朝（750—1258）において、イラン人の政治的進出はめざましく、またイスラーム文明の形成にもイラン人の貢献は大きい。

るが、13世紀にモンゴル人がカリフ体制を崩壊し、宗教緩和政策を施行するにおよんで、イラン人は自由にシーア派に帰依できるようになった。9世紀になると、イラン人による地方王朝の興隆も見られ、いわゆる「ペルシャのルネッサンス時代」が出現する。しかし、1501年サファビー朝が樹立されるまでの約5世紀のあいだ、ふたたびトルコ・モンゴルの異民族支配時代を迎えるのである。

サファビー朝（1501－1736）の創設者シャー・イスマーイールは、シーア派を国教と定めて、国家の統一と民族意識の高揚をはかったが、とくに第5代アッバース大帝（在位1588－1629）の治世下では、内外ともにその威力は絶大なものがあつた。その後、トルコ系アフシャル朝（1736－1749）、イラン系ザンド朝（1750－1794）、トルコ系カジャール朝（1796－1925）と続くが、カジャール朝の腐敗にたいして立ちあがったレザ・ハーン（在位1925－1941）により、1925年にパーレヴィ朝が出現する。

以上概略してきたイラン史は、複雑な異民族侵入と支配の反覆で綴られている。このイラン史を支えるイラン民族の精神的紐帯の核となつたものが、ほかならぬシーア派であつた。「ササン朝からサファビ朝までの8世紀半の間、ペルシャ人はシーア派に帰依することによって、彼らの支配者であつたアラブ人、セルジューク・トルコ人、モンゴル人、チムールなどから一線を画して民族の主体性を守り抜いた。その当然の帰結として、サファビ朝はシーア派を国教と定めたのである。シーア派が民族主義の媒体であるというよりも、シーア派＝イラン民族主義であるといつても過言でないかもしれない。」⁽³⁾

ところで、イラン人が国教とするシーア派は、イスラーム教の教義論争によって生じた分派ではなく、マホメットの後継者争いに端を発したものである。

ユダヤ＝キリスト教系譜に位置づけられるイスラーム教は、キリスト教より約600年おかれて登場し、キリスト教がユダヤ教の小乗性を打破し、より普遍性を提示したのにたいし、イスラームは、キリストの人格を媒介とし、超越者と個人との関係を規定するキリスト教の枠組から、超越者（アッラー）に絶対的権能を賦与することによって、三位一体的神観念を超越する。

コーラン第112章において

告げよ、「これぞ、アッラー、唯一なる神、
もろ人の依りまつるアッラーぞ。
子もなく親もなく、
ならぶ者なき御神ぞ。」⁽⁴⁾

と、示されているように、イスラームにおける超越者は、「唯一絶対の神」なのである。

註(3) 笹川正博「'79年動乱の深層－民族主義の奔流と宗教運動のうねり」（広河隆一編「燃える石油帝国・イラン」新泉社、1979年）48頁。

註(4) 井筒俊彦訳「コーラン・下」岩波文庫、311頁。

キリスト教の超越神エホバも唯一神であるが、キリストを神の子とみなすのにたいして、「子もなく親もない」永遠の唯一的存在者がアッラーなのである。万物の創造者であり、全知全能の至高者という神観念は、イスラームの徹底の大原則である。

また、イスラームにおいては、絶対的超越者と個人のあいだには、何らの媒介手段 — 例えばキリスト教における聖職者 — も存在せず、直接的に個人の超越者にたいする「信仰」（義）を介して両者の関係は成立する。アッラーの律法を伝える役割を担った予言者マホメットでさえ、アッラーの前には、他と同じ一個人としての平等な存在であった。ユダヤ教の「ヤハウェ」、キリスト教の「エホバ」、イスラームの「アッラー」と呼称の相違はあれ、同一超越者にたいする人間の関係は、イスラームにいたって、より徹底した平等化、普遍化を獲得するのである。

イスラームの救済財および救済方法は、「最後の審判」と「六信五行」によって、きわめて明快・直截に提示されている。

ラッパが吹かれるその日、人々のあいだの血のつながりは切れ、彼らは互いにたずねあうこともできなくなることだろう。そして（重ねた善行のために）秤が重くなった者は幸福になる。しかし秤が軽くなった者はすべておしまい。彼らは地獄に住み続けて業火に焼かれながら、その顔をしかめねばならぬことだろう。⁽⁵⁾（コーラン、第23章—101～104節）

天啓にしたがった現世的行為には、最後の審判によって、天国の楽園における永遠の生という報酬で報いられ、コーランには天国（第4章—57節、第44章—51～55節）や、地獄（第37章—63～67節、第56章—51～56節）が、具体的に繰返し描写されている。

イスラームにおける宗教的信仰と実践は、六信（神・天使・啓典・予言者・来世・定命）と五行（信仰告白・礼拝・救貧税・断食・巡礼）から成り、イスラームはこれらを受け入れるすべての人々に開かれた宗教である。「唯一神アッラー」への信仰を告白した瞬間から「同じ信仰を分かちあうすべての同信の徒にたいし、宗教法、シャリーアを媒介として責任をもつことになるのである。イスラームは、個人の信仰の純化を通じて絶対者に近づくという垂直的なアスペクトと同時に、シャリーアを介して信者たちの共同体、つまりイスラーム共同体（ウンマ・イスラーミーヤ）にたいし責任をもつというかたちで、水平的なアスペクトをも保有しているのである。」⁽⁶⁾

イスラームにおける世俗的共同体は、マホメットのウンマ（共同体）を意味し、宗教共同体であると同時に生活共同体でもある。イスラーム史によれば、本来人類は一つのウン

註(5) 田中四郎「コーランは生きている—アラブの秘典とマホメット」地産出版、1975年、141頁。

註(6) 黒田壽郎「イスラームの心」中公新書、（中央公論社）1980年、48頁。

マであったが、対立抗争により分裂し、多くのウンマが出現した。そこで超越者は「人々の争いを裁決し、彼らを正しい道に連れ戻すために、その各々のウンマにそこから選び出した神の使徒（予言者）を遣わし、彼らに啓示して正しい信仰と行為規範を伝えさせた」⁽⁷⁾のであり、ウンマは部族・民族を超えた存在で、そこから予言者が選出され、遣わされる単位集団である。このようにしてマホメットは最後の予言者として選出され、「マホメットのウンマ」こそ、神に選ばれた共同体として、神の定めた聖法（シャリーア）に従って、正義の実現を目的とする「聖なる共同体」なのである。そこで、このウンマの政治的指導者は神の使徒であり、その後継者はカリフと呼ばれ、ウラマー（聖法学者）は、共同体のイスラーム性の維持・増大の役割を担い、権力者にシャリーア施行の義務をうながすことができる。

マホメットの死後、彼のウンマの政治指導者として、選挙によりアブー・バクル、オマル、オスマーンの3代カリフ⁽⁸⁾が選出されるが、シーア派はこれらのカリフを認めず、第4代カリフ、アリーの血統につながる12代のイマーム⁽⁹⁾を信奉する。アリーはマホメットの従兄弟で、マホメットの娘と結婚するが、661年殺害され、以後歴代イマームはスンニ派のカリフ制と対立し、ことごとく迫害を受け、非業の死を遂げたと信じられている。とくに第3代イマームのホセイン（アリーの次男）は、メソポタミヤのカルバラで、ウマイヤ朝のカリフ、ヤズィードの軍団と戦闘を交え殉教したが、この時の壮絶な戦いは「カルバラの悲劇」として後代に語りつがれ、シーア派形成に決定的な方向を与えた。また、最後の12代イマーム、ムハンマド・マフディは、874年神隠しにあって、「隠れイマーム」として姿を消したと信じられ、ふたたび地上に正義と公正をもたらすために再臨するという。これが「マフディ信仰」と呼ばれるもので、今回のイラン革命の精神的支柱として作用したとも云われている。

シーア派の血統論は、教義上イマームの不謬性を打ち出し、「イマームは生涯いかなる罪を犯したり、罪に汚されることがない」として、イマーム個人にカリスマ性を賦与し、

註(7) 中村廣治郎「イスラーム思想と歴史」東京大学出版会、1977年、57頁。

註(8) 「カリフは予言者ムハンマド（マホメット）の後継者。アブー・バクル、ウマル、ウスマン、アリの4代を正統4カリフと呼び、予言者のイスラーム共同体に対する支配権とともに、宗教的指導性も併せ継承する政教の最高指導者とされた。ウマイヤ朝以後のカリフは、政権維持の権謀に走って宗教的指導性を失い、世俗的王同然の存在となった。」ホメイニ、共同通信社訳、「わが革命—イスラーム政府への道」共同通信社、1980年、195頁。

註(9) 「イマームは予言者の正統な後継者でイスラーム共同体の最高指導者。シーア派によるとイマームは予言者の女婿アリを初代とし、12代のムハンマド・マフディに終り（874年）、以後イマーム不在の時代となる。ムハンマド・マフディは隠れメシア（アルヒジャー）として復活し、世直しをすると信じられている。スンニ派は一般に礼拝の導師をイマームと呼ぶ。」同上、194頁。

マホメット、アリーを通じて「神の光」を継承し、絶対的な権威の保持を容認する。もちろんシーア派内部にもイマームの正統性をめぐる分派が生じているが、イランでは、シーア・12イマーム派⁽¹⁰⁾（ジャーファリー派）が国教となっている。

Ⅲ シャーの近代化政策

パーレビ王朝の創始者、レザ・ハーンの16年にわたる治世は、イギリス・ソ連との絶えざる緊張関係のもとに置かれながらも、イランの近代化を目標に、ナショナリズムを基盤として、西欧化、中央集権の確立への歩みを続けた。第2次世界大戦を中立て乗切ろうとしたレザ・ハーンも、ドイツ寄りを批判され、イギリス・ソ連の侵入により、皇位を皇太子（レザ・パーレビ）に譲って国外に退出し、アフリカで客死した。

1941年、即位したモハメッド・パーレビは、イラン革命によって国外に退去する1979年までの約40年間、まさに「アッラーの賜物、石油」を背景として、「ペルシャ帝国再現」にかけた栄光と悲惨のドラマを演じたのである。

すでにイラン史概略で示されているように、シーア派を武器とするイラン・ナショナリズムは、異民族支配の交錯するなかで、1,000年にわたって連綿と生き続けてきたのである。この伝統的エトスに、シャーの西欧的近代化が、いかなるインパクトを与えたのであろうか。

モハメッド・レザ・パーレビは、即位後、父レザ・ハーンの推進した近代主義を継承し、さらに強力に展開した。シーア派宗教指導者たちは、シャーの憲法違反に絶えざる批判の態度を示し続けたが、イランを「中東の日本」に仕立てあげようとするシャーの使命観は、これらに対抗し、力で抑圧を試みた。

第2次世界大戦中、連合軍の支配下に置かれていたイランでは、1945年の戦争終了後、イギリスとアメリカ両軍の撤兵は実現したが、ソ連はアゼルバイジャン地方を自国に併合しようとした。それにたいし、1946年イラン軍が進出して奪回し、一応外国軍隊の排除に成功する。

その後戦後処理の不安定な時期を経て、1951年に、モサデク首相は石油国有化を宣言した。時のペルシャ皇帝より、W・K・ダーシーが石油利権を獲得し、アングロ・イラニアン石油会社を設立して以来、産油国イランは、イギリスとソ連の侵略の的となった。第2次大戦後、石油会社の産油国への圧迫、例えば、1948年に2.22ドルであった石油価格が60年には、1.78ドルに下落し、半世紀にわたる外国管理は、石油ナショナリズムを胎動さ

註⑩ イランに定着したシーア派は、イラン的修正を蒙り、イマームの血統にイラン的要素、すなわちササーン朝以来の帝王の血統重視が加味されている。またイマームを通して内面的に神に回帰するというシーア派の特徴は、ゾロアスター教の原理である世界の円環的生成発展の原理を基盤とするものである。

せる。そこで国民戦線を結成したモサデタ博士は1951から53年にかけて石油国有化紛争を惹起し、シャーはモサデクと衝突してローマに亡命する。しかし石油メジャーのボイコットにより挫折したモサデク政府にかわって帰国したシャーは、アメリカの支援を得て、以後あらゆる政敵の一掃に乗り出すことになったが、1957年までは経済再建に苦悩する。

1963年1月、6項目の改革案を提出して、シャーの「白色革命」が開始された。(1)農地改革、(2)森林国有化、(3)国営工場民間払下げ、(4)工場労働者への利益還元、(5)婦人参政権、(6)文盲撲滅部隊(知識部隊)創設である。これらはただちに国民投票にふされ、圧倒的多数で改革案は採択された。その後1965年から67年にかけて、(7)農村医療隊の設置、(8)技術教育の促進、(9)農村裁判所の設置、(10)水資源の国有化、(11)都市と農村の再建、(12)官僚組織の再編成の6項目を追加した。オイル・ショック後の飛躍的な石油収入の増大を基盤として、1974年にさらに次の5項目が加わる。(13)政府民間企業の株式の一般公開、(14)物資の価格適正化と高値防止、(15)教育の無料化、(16)2才までの幼児の無料給食、(17)保健制度の拡充である。

以上17項目にわたるシャーの「白色革命」がいかなる結果を引きおこすか、以下、簡略に述べてみよう。

イランの農業発展を阻止してきた要因として、大地主の存在、水不足、前近代的農耕法があげられる。封建的地主と小作制度を廃止するため、第1次(1962年)、第2次(1963年)、第3次(1966年)と、3回にわたって農地改革が断行されるが、結果的には農村の社会・経済構造の破壊をもたらし、農民にもっとも強烈な打撃を与えた。白色革命最大の目的である農地改革は、農民に20ヘクタールの灌漑地か、40ヘクタールの非灌漑地かのいずれかを与えることが土地改革法によって規定されている。しかし実際に与えられた土地は2ヘクタールにすぎず、現実には「農家の35%はまったく土地を持たず、40%は1.2ヘクタールの土地を持つにすぎない。家族経営農地の平均面積は2.5ヘクタールで、農場主の76%が農業所得の20%を分け合っている。」⁽¹¹⁾

白色革命以前、大土地所有者であった1,000家族といわれた大地主は、農地再分配によって決定的な損害を蒙るはずであったが、他に分割した農地にたいする賠償を受け、新たな資本を手に入れる結果となる。このような土地とその所有の細分化は、ポネーと呼ばれる共同体組織を崩壊させた。ポネーは農村における協同労働の単位で、通常5人から13人の農民によって構成され、土地にたいするある程度の権利と数頭の牛を所有している。そして年間300—340ミリの降雨量しかない砂漠の農地では、伝統的にカナート(地下灌漑水路)よりの水の分配とその維持のための共同作業は必須の条件であり、これもポネーの重要な

註(11) アーマド・フェルギー、ジャン・ルー・ルベリエ、弥永康夫訳「イラン`神の革命`の内幕」朝日イブニングニュース社、1979年、84頁。

役割の一つとなっていた。しかし土地分配にあずからなかった農民は、大量に都市へ移動し、ポネー構造は維持しがたく、さらに近代的灌漑設備として建設された大ダムは、カナートの地下水路の流れを混乱させ、水位の低下や枯渇を招来した。また大ダム周辺の開発予定農地の計画も進行せず1962年に完成したフチスタンにおけるデッドダムでは、95,000ヘクタールの開発予定地が、1974年までに20,000ヘクタールが灌漑されただけで、57,000ヘクタールの土地から38,000家族が退出している。

農地改革以前は、人口の約75%が農業に従事し、農業が国民総生産の70%を占めていた農業国イランが、わずか10数年のあいだに、農業従事者は40%、国民総生産に占める農業は16%に減少したのである。1971年まで農産物を輸出した国が、1977年には15億ドルの食糧輸入国に変貌したのである。このようにしてシャーの農地改革は、かえって農村の停滞をもたらし、農民を絶対的貧困の窮地に追いつめたのである。

工業生産部門においても、大規模な工業化が企画されるようになったのは1962年以降で、従来の軽工業に加え、政府は特定地域を抽出して「主要工業の極地域」と定め、それぞれの基幹工業を推進している。例えばアゼルバイジャン州は工作機械、エスファハン州では製鉄、フーズスターン州は石油化学と金属工業などである。しかしイラン経済の発展を支える中枢は、何と言っても石油工業で、国民総生産に占める石油の割合は、1966年に13%であったものが、1972年には19.5%、73～8年には48.7%と総生産の約半分を占めるに至っている。サウジアラビアに次ぐ中東第2の産油量をもつイランでは、石油は自国の経済的自立の達成に貢献するというよりは、より広範な世界経済のサイクルに組み込まれ、対外依存型形態へと展開する。

「石油がなければ、現在のイランは、エジプトよりは少しばかり豊かな農業経済のままだろう。」⁽¹²⁾ と言われるように、イランは伝統的に農業国であった。ところが突如として今世紀のはじめ、「先進工業国の血」ともなる石油が噴出したのである。「アッラーの賜物」であったはずの石油は、イラン民衆の福祉に奉仕するために使用されたのではなく、シャーの「経済よりも政治、つまり再生イランでシャー自身が生き残るための政治」⁽¹³⁾に奉仕したのである。

1908年に英人W・ダーシーによって、マスデジ・スライマーンで中東最初の石油採出に成功して以来、1951年のモサデクによる石油国有化まで、イランにおける石油事業はイギリスに掌握されていた。ところが、イラン人の技師不足で精油所の操業は不可能となり、1953年モサデク崩壊後、英米仏を含む8大石油会社による国際石油企業団（コンソーシアム）が成立した。コンソーシアムは協定により、イラン南部 — イラン石油の90%以上を生産する — を採掘し、イラン国営石油会社（NIOC）は、協定地域外で油田を求め

註12 ロバート・グレーム、宝利尚一他訳「イラン石油王国の崩壊」柘植書房、1979年、49頁。

ねばならなかった。イラン側にとってのこの不利な条件を是正するため交渉は重ねられ、遂に1973年コンソシアム資産の国有化に成功した。

パーレビ王朝が2代にわたってなめつくした外圧から立ち上がり、1973年石油価格を4倍に値上げして以来、消費しきれないほどの巨大な利益は、シャーの軍事大国への目標を達成するため、アメリカからの武器購入に費された。1954年から63年の間に、5億ドルに近い軍事援助を与えたアメリカは、「ペルシャ湾の憲兵」を自負するシャーに、1974年以降アメリカ兵器産業の総輸出量の35%以上を売り込んだ。このようにしてイランの軍事予算は1974年の20億ドルに対し、75年には100億ドルに達し、シャーは国家予算の30%を軍事費に当てていた。このことは、モサデク失脚後、シャーの軍隊がアメリカの世界軍事体制に組み込まれていくことを示している。

IV バザールとモスク

イランの伝統的社会におけるバザール(市場)は、イラン諸都市に存在する商業活動の中心地であり、また財政(金融)上の核であり、商人、職人などが、その家族とともに住む地区である。テヘランだけでもバザラー(バザールの商人)は20万人もいると言われている。「最近までこの国の輸入の3分の1、石油をのぞく輸出の大部分、さらに小売取引の3分の2を取扱っていた。」⁽¹⁴⁾

「絨緞商法」と呼ばれる特異な伝統的売買テクニックをもつバザール商法の領域にも、シャーの近代化政策の波は、容赦なく侵入してきた。「公定価格規制令」である。これはバザールの商人たちが伝統的に保持していたイランにおける商品の最低価格の操作権を、バザラーから剥奪する結果になる。SAVAK(国家安全情報組織)⁽¹⁵⁾の監視下に置かれた商業会議所は、この価格規制を順守しない者には、罰金、商店の一時的あるいは永久的閉鎖、また商人とその家族を含めた追放処置などをもって対処した。行政当局や税務所の横暴はバザラーの反感を極度に刺激するものであったが、「価格統制の期間中、テヘランおよび10にのぼる他の諸都市の25万人におよぶ店主は逮捕され、罰金を課せられ、投獄された約8,000人が処罰された」⁽¹⁶⁾と言われている。

全国のパザラーを激怒させたシャーの政策は、この「統制価格規制令」のほかに、労

註(13) 同上、17頁。

註(14) Don A. Schanche, Merchants Key to Shah Opposition—Iran's Bazaars Reveal Power, International Herald Tribune, 1979—1—16.

註(15) SAVAK(国家安全情報組織の略)、1957年に「国家の安全を守るとともに公共の利益に反するあらゆる陰謀を防ぐため」に創設された。この組織は国王の手足となって、あらゆる反体制活動を弾圧した。

註(16) Don A. Schanche, op. cit.,

働者の「社会保障保険」の支払い要求がある。敬虔なイスラム教徒である彼らは、貧者への喜捨による相互扶助の実践者であり、政府の年金制度は、イスラム法違反だと解釈した。その他、テヘランのバザールの中心に、8レーンのハイウェイを建設する計画にたいする反対、さらにシャーの近代化政策の先頭に名乗り出た新興ブルジョワたちの、反イスラム的営利行為にも批判の声があげられた。

統的な「絨緞商法」の背後には、イスラーム教的経済行為の規制、すなわちイスラーム的「市場倫理」が強く作用し、彼らの商業道德の核心にはイスラーム教が存在するのである。バザラーはとくに積極的なシーア派教徒で、各バザールには信者の寄附でモスクが建てられている。本来バザールはモスクの門前市として発達したが、商人たちはバザールの協同組合を通じて、収益の5分の1を寄進している。具体的な数字として、「支持するムッラー（僧職）に年五百万リアル（千五百万円）から十万リアル（三十万円）。純利益の五分の一ということによって違う」¹¹⁷⁾という個人的解答や、多い人で2,000万リアル（6,000万円）少ないのは20万リアル（60万）とも言われる。

バザールの商人からホムス（前記の5分の1税）を受取った協同組合は、任意の選択によって、ムッラーにそれを手渡す。この際どのムッラーに手渡すかは協同組合の自主性にゆだねられているが、多くは地元のムッラーが受取り、モスクの管理、託児所、養老院、貧困者救済などに充当されている。シーア派宗教指導者の位置づけは、民衆の支持によって決定される。したがって、民衆の意志や利益を代弁しない宗教指導者は失格なのである。イランにおけるシーア派宗教指導者が、スンニー派のそれにより独立性に富んでいるのも、バザールの大商人との密接な関係を保っているからであり、例えばホメイニ師と並ぶ大アヤトラの一人であるゴルバイガニ師は、毎月1億5,000万円に達する老大な資金を動かすことができる。もちろん国家からの補助金も受取っているが、1977年シャーが宗教指導者たちに与えた金額が8,000万ドルであるのにたいし、バザールが彼らに与えた金額は3億ドルを越えると言われている。

敬虔なシーア派教徒であるバザールの商人たちは、コーランの教えにしたがって、「利息の禁止」や「金銭の使い方」などを忠実に実践する。利息の禁止についての一例を示せば、

利息をむさぼる者どもは、（復活の日に）サタンの一撃で倒れた者が立ちあがるようにしか、立ちあがることはできないだろう。それは彼らが「商売も利息を取るのと同じことだ」と言っていたからである。アッラーは商売はお許しになったが、利息を取るとは禁じておられる。しかしアッラーの戒めに接してそれをやめた者には、それまで得

註117 「バザール商人—イスラム新世紀、中東の挑戦、イランから」朝日新聞、1980年3月27日。

註118 「宗教界の構図—イスラム新世紀、中東の挑戦、イランから」朝日新聞、1980年3月22日、参照。

たものだけは与えられることだろう。(第2章275節)⁽¹⁹⁾

また、金銭の使用法については、

人々は、「お金は何に使えばよいでしょうか」と、お前（マホメット）にたずねることだろう。言ってやるがよい。「お前たちのお金は、両親、親戚縁者、みなし児、貧しい人、および旅人たちのために使うのが最もよい。アッラーはお前たちの善行のすべてをご存じである」と。(第2章215節)⁽²⁰⁾

イスラム教においては世俗的財の一切は、アッラーに所属する。「イスラム教での経済観をみていくと、まず、アッラーが万物の持ち主であって、人間が使用しているもの、あるいは享受している土地・穀物・森林資源など、これらすべてはアッラーのものだという考え方が根本にある。つまり、そもそも人間は、アッラーの地上における代理人にすぎないのであって、実際には何も所有していない。」⁽²¹⁾ ということである。富はアッラーの賜物であり、私的に貯財したり、浪費してはならないのであり、共通に分配されるべきものである。そこでホムスや、大きな利益をあげた時の浄財税ともいうべきものが、バザールのモスクに寄進されている。

政府からの補助金を受取っているものの、それにまさる巨額の資金をバザールから受取って生計をたて、活動している宗教指導者たちにとっては、バザールとの関係は不可分であって、バザールの商人の意志と利益の擁護の役割を、伝統的にモスクは担ってきたのである。シャーの土地改革によって、寺院領収入の減少をきたし、また石油ショック以後、多量の武器購入によってもたらされた赤字財政の穴うめに、モスクへの補助金を3,000万ドルに削減された宗教指導者たちと、近代化政策によってバザールの伝統的経済構造を破壊され、その打撃に苦慮する商人たちとの経済的利害関係は、一体となって、シャーへの対抗的勢力の拡大へと発展してゆくのである。

バザール内部における伝統的社會構造は、5人の主要リーダーを頂点として、それぞれサブリーダーを従えている。5人のうち1人が議長として行動するが、サブリーダーの下には順に下位集団の長と連結するピラミッド型構造を形成している。底辺はバザールの何万というポーターや労働者に拡大されていく。バザールのリーダーたちは、いずれも巨大な商人で、名実ともにバザールの支配者であった。彼らは家族的紐帯を通して、職能人や知識人にも深い影響力をもつと考えられている。多くの場合、バザールの金持の息子たちは、教育のためにバザールを離れ、法律、医学、大学、政府官僚制の内部にくだり込んでいく。

註(19) 田中四郎，前掲書，114頁。

註(20) 同上，112頁。

註(21) 平島祥男，「右手にコーラン左手に石油」ごま書房，1980年，66頁。

1978年以後、ひんばんにくり返されるバザールでのストや街頭デモの人員動員はバザールのリーダーたちによって指令され、30分以内に5,000人を街頭に立たせる組織力をもっている。また全国に網羅されたネットワークを用いて、イラン全土のバザールの情報はテヘランの中央に収集される。幾世紀にもわたって、バザール内部で育成されてきた商業的・宗教的紐帯は、近代的労働組合もおよばないほどの結合力を発揮したのである。実質的に、革命の物質的力となったのはバザールの商人たちであり、デモに参加する人々に衣食住を保障するため、シーア派宗教指導者たちの要求する巨額の金を投入したのもバザールであった。

V 宗教指導者と殉教のエートス

イラン史2,500年を通して、民族的独立と発展を維持し得た約10世紀を除いて、他の5分の3は異民族支配に隷従する歴史で貫かれている。イランが641年にイスラーム・アラブ圏の支配下に入り、シーア派に改宗しはじめて以来、シーア派宗教指導者たちは、つねに時の政治的抗争の指導的役割を果し、国家的危機においてダイナミックな指導性を発揮した。

シーア派は1502年に国教になってから、確立された宗教として組織化されたが、教団としての発展は見られなかった。しかし、シーア派宗教指導者は、スンニー派よりもはるかに中央集権化の度合が高く、組織的団結や政治的権力からの独立は容易であった。

シーア派宗教指導者の組織は、下部に主として農村の指導者としての役割を担ったムッラーが配置され、その上部にムジュタヒド、さらにムジュタヒドから選出される最高指導者がアヤトラであり、ムジュタヒドと呼ばれる宗教指導者は、シーア派の教義解釈に権限をもっている。これら宗教指導者の過半数は質素な村落出身者で、全員が聖地コムの神学訓練学校で学び、その後故郷に帰るが、「これが強力な全国的シーア派組織の地道な支え」^②であった。また宗教指導者の昇進は、各モスクの集会における合意によって決定され、知的、人格的、実践的指導力や赤貧などの評価を基盤とする。とくに「赤貧」は重要で、アヤトラたちにとって欠かすことのできない条件である。したがって18万人の宗教指導者（ムッラー）や、1,200人とも云われるアヤトラは、民衆の尊敬を受け、政治的威信も強大であった。イラン史に卓越するホメイニ師の非妥協的個性と宗教指導者としての威信は、このようなシーア派の歴史的伝統に立脚したものである。

イラン近代史に特筆される「タバコ・ボイコット運動」（1891年）も、シーア派宗教指導者、アヤトラ・シラージーに指導された。時のカジャール朝は、ロシアの南下政策に悩

註② G・H・ジャンセン、最首公司訳「挑戦するイスラーム—なぜ彼らは西欧世界と闘うのか」ダイヤモンド社、1980年、163頁。

まされ、英国と結ぶが、英国人タルボットがタバコ専売権の特許を獲得した時、シーア派宗教指導者たちは、政府の英国従属政策に抗議して立ち上がった。シラージーは民衆に禁煙令を出し、それは完全に遵守され、遂に国王はイギリスに50万ポンドの賠償を支払って、専売権を廃止せざるを得なかったのである。弱体化を露呈していたカジャール朝も、この事件以来その権威は失墜し、1906年に革命によって憲法が制定されるが、これは議会制度を通じて、民主主義の確立を意味するものである。すぐれた5人の宗教指導者から成る委員会が、イスラームに照らして法案を監視する条項が存在するものの、基本的には政治的自由を基盤とする憲法であった。また1906年にはイラン史上最初の選挙により133人の代議士が誕生し、彼らは団結して、外国支配を排除しようと試みた。これに対してイギリスとロシアはイランを南北に分割して、その影響下に置くことになる。

第1次大戦後、ロシア革命によって支配力を一時後退させたロシアに代って、すでに1901年、W・K・ダーシーが時のペルシャ皇帯から石油利権を入手し、アングロ・イランニアン会社を設立していたイギリスは、石油需要の拡大から、イラン支配に積極的姿勢を打ち出す。そこでイギリスの強力な後援を得て、コサック旅団の司令官であったレザ・ハーンがカジャール朝を廃し、1926年パーレビ朝を興し、軍事独裁者として君臨することになる。パーレビ朝（1925－1979）は創設以来、シーア派宗教指導者たちとの熾烈な闘争を展開してきた。

イラン・シーア派の最高指導者、アヤトラ・ホメイニ師は、1942年、「イスラム教国の独立とコーラン信仰の民の進歩を確立する」と題する論文を発表して以来、シーア派の理念をかがげ、反王制運動を開始した。ホメイニ師の父親も宗教指導者で、1905年の革命の時、憲法擁護派に参加し、死亡している。1961年、ケネディの米政府の干渉に際し、その排除を主張して、シャーに対抗し、さらに1963年、「白色革命批判」の演説を行って逮捕され、これに抗議した民衆は内乱を引き起こす。同年ふたたび、アメリカ人軍事顧問に外交特権を与えようとする法律に反対して立ちあがり、1964年にトルコへ、さらにイラクのナジャフ（シーア派の聖地の一つ）へ追放された。しかし1978年、ホメイニ師はイラク政府によって、ふたたびフランスのノーフル・ル・シャトーに追放される。

「イスラームの教義に基づく世襲王制の否定と、外国の支配、腐敗した政治への攻撃」²³⁾をかがげて、ホメイニ師はイラン革命の後、帰国するまでの15年間、国外にあってその戦いを続行したのである。彼は政治革命の必要性和イスラーム政府樹立の正当性を主張して、倦むことなくその聖戦（ハジド）を展開した。

ホメイニ師によれば、イスラーム政府の理想的形態は、シーア派初代イマーム、アリーの時代に求められている。予言者マホメットの伝えた律法は、永久に執行されねばならず、

註²³⁾ ホメイニ「わが革命」前掲書、204頁。

そのためには「政府が存在し、この政府が執行および行政の権威の諸資源を持つことが必要」⁽²⁴⁾となるのである。また、律法の継続的執行機関としての政府には、イスラーム法の知識と正義を所有する律法学者が、その任に当らなければならない。しかし、ウマイヤ朝以後、カリフ制はサルタンと世襲の王制に代替されたが、これはイスラーム法に違反するものである。さらに植民地主義者の支配から脱して、イスラーム教徒の統一と維持を達成するためにも、植民地主義者の手先となっている政府を否定しなければならない。ホメイニ師の政治革命の必要性はここに集中し、イスラームの原初的政治形態と理念への回帰と再現を志向したものである。

1973年以來、反体制運動を推進するうえで、モスクは重要な役割を演じはじめた。S A V A Kの徹底的弾圧によって、反体制運動の諸組織⁽²⁵⁾は極度に弱体化していた。1978年にいたって、革命的諸勢力は党員数の不足により、体制との闘いを指揮する能力を喪失していた。「そのために人民の暴動は反対勢力の組織の枠外で発生し、続けられたのである。ただシーア派イスラームのみが、巨大な網のように全国に広がっている司祭、寺院、強大な財力と信者たちの信仰の厚さなどによって、体制と闘う戦士たちの「参謀本部」、作戦根拠地たり得たのだった。」⁽²⁶⁾

イラン人が被征服者として、イスラームの正統派であるスンニー派を排して、少数異端のシーア派を選択した背景には、イラン独自の伝統的・歴史的特質が複雑に作用している。イスラーム・シーア派は、その内的構造の中心に「殉教のエートス」を配置し、受難のモチーフを基底として、「マスディ信仰」に連結する。「義のために決起したものが殉教することによって義が成就し、宗教が実現する。」⁽²⁷⁾という信仰は、殉教者中の殉教者として卓越した地位を与えられている第3代イマーム・ホセインの殉教の日を記念して、「アシュラ」と呼ばれる宗教的行事を形成したのである。毎年くり返される「アシュラ」の行事は、シーア派の原初的経験に回帰し、殉教の悲劇を内的に追体験することを目的とする。箒の穂に鉄鋌をつけたようなもので背中を打ちながら歩く、ザンジルと呼ばれる行事は、最も高揚された受難の追体験である。

セム人アラブによって征服される1,000年も以前に、すでに輝かしい歴史と文化を誇るアリア人ペルシャの矜持は、その後の歴史的屈折を通して、「殉教のエートス」に貫か

註24 同上、33頁。

註25 イランにおける反体制運動には、シーア派のほかにマルクス主義と民族主義の運動がある。マルクス主義はツデー党と革命的マルクス・レーニン主義グループに分れ、民族主義は国民戦線を組織し、イラン政府に対する帝国主義者の支配に対抗するイラン主義を特徴とする。

註26 アーマド・フェルギー他、前掲書、235頁。

註27 加賀谷寛「イスラームの世界」(東洋経済編「イラン革命と石油・日本」東洋経済新報社、1979年)72頁。

れたシーア派の担い手として、まさに適合的であった。いつの日か、シーア派教徒に危機が訪れたとき、874年に姿を消した「隠れイマーム」が救世主として復活し、ふたたび不認の最高指導者として、この世に正義をもたらすであろうという救世主思想は、少数異端派を固守するイラン民族の究極の拠りどころであった。

「殉教のエートス」は、その存続のために「タキーヤ」と「バスト」という内的・外的保身技術を発展させた。シーア派においては、自己の信仰を外部より守るために自らの内奥深く秘め、外部にたいして表明しなくてもよいという独特の慣行が認められ、これを「タキーヤ」という。今回のイラン革命に際し、ホメイニ師は民衆に「今こそ聖戦（ハジド）に参加すべきとき」として、「タキーヤ」の放棄を呼びかけている。「バスト」の慣習は、『モスクとかアヤトラの住居、聖者の廟、またはここに逃げ込むことをバストというが、ここへは政府の権力は及ばない。カジャール朝のころからモッラー、バザールの商人、職人などが政府に抗議を行ない、身の危険を感じるとバストに訴えた。さきに述べた「タバコ・ボイコット」運動がこのような抗議の例だが、国王も手も足も出ず、要求はほとんど常に通った。』²⁸⁾ 1978年5月に、聖地コムのアヤトラ・シャリアト・マダリの前で、シャーの警察が2人のモッラーを射殺した事件は、「バスト」慣行を持つ民衆を激怒させるに十分であった。

エートスが変革のエネルギーとして噴出するには、非合理的契機を内包するパストと、冷静な倫理的精神との緊張の結合関係が要請される。ウェーバーのエートス論においては主体の内部に非合理的契機と合理的日常的契機の矛盾的結合、すなわち、古プロテスタンティズムのパストと禁欲的エートスの結合が、やがて世俗的職業的エートスに転化され、伝統的社会的突破がなされるのである。

シーア派の「殉教のエートス」においては、マフディ信仰という非合理的契機と、シャリーアに従う実践的理念に貫かれた宗教指導者の合理的契機が、シャーの近代化という異質のエートスに直面して結合し、突破のエネルギーとして作動したのである。「シーア派には政治生活の現実に対してプラグマティズムと理性的解釈の伝統がある。』²⁹⁾

このプラグマティズムと理性的解釈の伝統の担い手が宗教指導者層であり、とくにホメイニ師は15年間国外にあってハジド（聖戦）を呼びかけ、その政治カリスマ的存在が、民衆のマフディ信仰の「メシヤ再臨」に適合するのである。シャーの近代化政策により決定な損害を受けた農民やバザールの商人層が、宗教指導者層と一体化したとき、超最新式近代兵器を具備した40万のシャーの軍隊にむかって、規律ある統制を保つ民衆として行動し得たのである。本来感情的大群衆であるはずの民衆が、統一されたスローガンや

註²⁸⁾ 笹川正博「'79年動乱の深層」前掲書、57頁。

註²⁹⁾ 藤村信「イラン革命の社会学」世界、岩波書店、1979年4月号、141頁。

同じことばを記した数千のノボリをたて、また同じ抗議の歌や詩を唱えたのである。この組織力は、イラン全国に散在する18万人にのぼる宗教指導者たちとの日常的実践の紐帯により発揮され得たのだった。

16世紀初頭、シーア派が国教と定められて以来3世紀以上を経過し、すでに沈潜したかに見えた宗教的パトスは、民衆の内部にいまなお巨大な活力を秘めていたのである。

VI おわりに

イランはイスラーム・シーア派の伝統的土壌であった。本源的にアラブの宗教として創意されたイスラームが、すでに固有の高度な社会・文化的基盤の上に形成されたペルシャに侵入したとき、異質のイスラームは、ペルシャ的加工をほどこされ、なおかつ、その選択の対象は、圧倒的多数を占める正統派に対立する極少の異端派であった。

ハミルトン・ギブは、シーア派の抵抗を「発展性を欠く反対運動」とみなし、このような反対運動におち入ったのは、イスラームの宗教共同体（ウンマ）意識を拒否したためであると説明しているが、たしかにイランは、アラブの宗教共同体構想の内部に組み込まれることも拒否し、極めて挑戦的・政治的意識のもとにシーア派を受容したのである。シーア派は「最初から、権力——当初、それはアラブ人の大守であった——に対する政治的、宗教的な異議申し立てだった。現世の権力に対してシーア派が一貫して反対していたため、シーア派信徒は早くからイスラーム内の革命主義者とみられてきた。」³⁰⁾

伝統的にイラン社会は、その地理的条件にしたがって、孤立した小共同体を形成していた。年間300ないし340ミリの降雨量は、国土のなかに広大な砂漠を形成し、河川や湖沼の欠如をもたらし、必然的に人口の分散現象が出現する。地理的障害とくに交通網の未発達により各地の小共同体は、それ自身の孤立した小宇宙を形成し、共同体間の水平的結合を困難にした。農村における群小共同体と同様、東西諸国のかけ橋となって地の利を得た商業都市においても、宗派・人種・部族あるいは商人層など分離独立した居住区に割拠していた。マルクスの指摘するアジア的専制の基盤としての小共同体割拠と抗争は、今日にいたるまで、イラン社会構造の特質となっている。

このような社会構造の上に、シャーが構築した支配装置は、巨大な石油利益を背景に「パーレビ財団」による経済支配、空・陸にわたる最新装備をもつ精鋭な軍隊、6万人におよぶ国家警察など「金と力」を基盤として生み出された。「白色革命」の名の下に、農業の近代化、工業生産の伸展を構想しながら、伝統的なイランの経済・社会構造を考慮に入れない政策は、逆に農民や都市の伝統的商工業者に多大の打撃を与え、白色革命や石油収入による富は、シャー自身と王の周辺に配置された2,000家族といわれる新興ブルジョワ

註30) アーマド・ファルギー他「イラン「神の革命」の内幕」前掲書、55頁。

層に奉仕したに過ぎなかった。

イラン革命は古い伝統的社会を根源的に変革したのではない。シーア派の伝統的エートスの世界に、西欧的近代のエートスが持ち込まれたとき、これの排除を試みたのである。これは、イスラーム世界が独自の近代化を模索する過程での一現象として把握される。

イラン革命の思想的父と云われるアリ・シャリアティは、「マルキシズム、実存主義、現象学に照らしてシーア・イスラーム思想を再建すること」^{⑧1}を目標とし、また、リビヤのカダフィも、近代化・工業化の促進を目ざしながらも、イスラームと近代化を補完関係に置き、イスラームの枠組の内部で近代化の実践を開始している。バニサドル大統領も新生イランの進むべき道を、ポスト・石油にむけ、経済構造転換の急務を訴えている。20年ないし25年後には酒濁するであろう石油からの収入に依存する現状からの脱却である。^{⑧2}

エートスにおける非合理的契機と合理的契機が異なる社会層に分有され、異質のエートスに媒介されて結合し、その結果出現したイラン革命は、今後個々の主体内での両者の結合関係を実現し、時間的経過のうちに矛盾的緊張の闘争を克服したとき、あらたなエートスが形成されるのであろう。

(本学講師 社会福祉担当)

〔文 献〕

ハミルトン・ギブ、加賀谷寛・内記良一・中岡三益・林武訳「イスラーム文明史—政治・宗教・文学にわたる7章」みすず書房、1968年。

荒松雄「ヒンドゥー教とイスラーム教—南アジア史における宗教と社会—」岩波新書、1977年。

蒲生礼一「イスラーム(回教)」岩波新書、1958年。

五十嵐一「イラン体験—落とされた果実への挽歌」東洋経済新報社、1979年。

吉村作治「イスラームとアラブ・ビジネス」日本工業新聞社、1979年。

ウィルフレッド・C・スミス、中村廣治郎訳「現代におけるイスラーム」紀伊国屋書店、1974年。

註⑧1 G・H・ジャンセン「挑戦するイスラーム」前掲書、154頁。

註⑧2 アブルハッサン・バニサドル、中東ジャーナリズム研究会訳「イラン革命日記」中央公論、1980年5月、参照。